

香林寺

寺号 曹洞宗内牧山香林寺

本尊 釈迦牟尼坐像 作者年代等不詳

脇仏 普賢菩薩坐像 作者年代等不詳

文殊菩薩坐像 作者年代等不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、曹洞宗、常陸国行方郡上戸村長谷寺末、内牧山と号す。

開山眞雙、元龜元年【一、五七〇】示寂す。本尊釈迦を安ぜり、白山社・鐘楼享保十四年鑄造の鐘をかく、と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「香林寺」村の中央にあり、曹洞宗常陸国鹿島郡鹿島村長国寺の末派なり、創立開基未詳○『新編武蔵風土記稿』を閲るに

開山眞雙、元龜元年三月十三日示寂すと載す。と記されている。

『寺の伝記』

寺の故老からの伝えによると、開基は、香林道春居士という。開山は茨城県行方郡牛堀町長国寺眞雙堯達と伝えるも、開山の年代不詳なりとある。

この寺は、内牧村の中央にあり檀家は二区【上原・内原・下原】の区域を主として除く地域内が殆ど檀家となっている。但し楽応寺の檀家は除く。

「寺の建築歴」

開山以来百年を経た寛文年間に全山焼失し、古文書・記録等もない。その後大正十五年鐘楼【この鐘は二十七世泉巖の代に建立】を残し焼失し、昭和四年本堂を再建、昭和四十四年庫裡を再建す。

「寺内の石仏等」

地藏尊二体・板碑五体【青石塔婆：一体に金文字あり】金石文【灯籠】

一体。境内外に地藏尊三体

『寺の管理する仏堂』

王千寺【千手観音】・三宝堂【阿弥陀如来】・阿弥陀堂【阿弥陀如来】

その他

古代の寺院住職は特に禅宗は内大臣の勸請により、輪旨を受ける必要があり。その書類一卷を現存する。

楽 応 寺

寺号 曹洞宗東雲山楽応寺【通称内牧薬師堂】

本尊 薬師如来坐像 天元三年、恵心僧都作

脇仏 日光菩薩像 作者年代等不詳

月光菩薩像 作者年代等不詳

十二神将軍像 作者年代等不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、「薬師堂」天正十三年建立と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「薬師堂」村の南にあり。と記されている。

『寺の伝記』

香林寺に所蔵されている「古文書」『東雲山楽応寺由来書』一巻がある。

【漢文体】

『武州岩付領内牧村薬師堂略縁起』には、次ぎのような事項が記載されている。

仁王第六十四代、円融天皇のころ、藤原大納言公任という人が子細あつて当所の傍らに住し時、天元三年庚辰の年【九八〇】父母の孝養の為、逆修善根の塚を築きし時、当時回国修業にありし恵心僧都が行脚の途中、この地を訪れたので公任は、僧都に導師を依頼したところ、恵心僧都は、公任の殊勝な志に感じて本尊として、御長六寸の瑠璃光薬師如来の坐像を刻まれ供具を備えて、自ら開眼の供養をして安置されたと言う。

後年に至り、私、渋江大和守楽応、岩付城主たりし時かの御仏の靈感深くしてなお数

外の不思議を蒙る。よつて、この尊像を敬拝す。しかるに悲しい哉、天元よりの数百年

を経て堂塔大破し秘仏も塵にまみれており、なげかわしく、昔の建物には及ばないが、

信心の為草堂を建立して尊像を安置し、東雲山樂応寺と命名、末永く靈驗の無窮を祈る。

岩付城主 渋江大和守樂応【花押】

家老 新井長津【花押】

◎右の文を解説説明すると次のとおり。

第六十四代、円融天皇の御世【九六九〜九八三】、後に大納言となった藤原朝臣公任が東国に下り奥州に向かう途中、子細あり【奥州に入ることが情勢不利であった】この地にとどまり【註、当時は薬師堂の付近に奥州に通じる唯一の古道があった】公任は、ここに仮住まいしながら遠く都に住む父母の幸福を祈るため、逆修善根【生きていくうちに良いことをする】の塚を、天元三年【九八〇】に築いた。当時回国修業の途にあった恵心僧都【天台宗の僧で源信ともいう。】に、このことを語り、導師

を依頼したところ、恵心僧都は、薬師如来の坐像を刻まれ開眼供養をされたと伝えられている。それから年代を経た後、渋江大和守楽応【岩付城主とあるが、この時代は岩付：岩槻・渋江・百間郷の地頭職と考えられる。】は、薬師信仰の厚い人であった。たまたま領内を巡視の際にこの地の薬師堂の荒廃を発見し、秘仏の埃まみれであることを心痛し草堂を結び、東雲山楽応寺と命名したことを後世に伝えるべく、縁起を記したと述べている。【註、付近に新井氏の姓の家があるが、家老の新井氏の子孫？】

『寺の行事他』 「一」

昭和四十八年に、現本堂を改築した際堂内の支柱に墨書が発見された。文面は次のとおり、元禄十五年、岩付安楽寺の大阿闍梨某が百間領寺村の大工中村某に依頼して修築したと記されている。

「二」

この薬師如来像は、古くから眼病に靈験があることから民間信仰の中に
伝承されてきた。

薬師堂の縁日は、毎月八日と二月・八月の十六日に行なわれている。
特に寅年には、尊像の門扉を開いて、お開帳の法要が営まれる。

圓 乘 院

寺号 真言宗智山派寶珠山錫杖寺圓乘院

本尊 阿弥陀如来像 作者年代不詳

脇仏 弘法大師像 寛文四年俊弘法印作

興行大師像 寛文四年俊弘法印作

地藏尊 作者年代不詳

不動明王像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、粕壁宿最勝院門徒、寶珠山と号す。元和元年【一、六一五】の起立と云、開山堯俊寂年を伝へず、弥陀を本尊とせり。天神社・

地藏堂と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「圓乘院」村の西方にあり、新義真言宗粕壁宿最勝院の末派な

り、と記されている。

『寺の伝記』 「一」

言伝えによると、圓乘院は梅若塚創建当時より、塚守【墓守】としての僧庵があつた

と伝えられている。慶長時代【一、六〇〇頃】堯海上人が開山僧として寺を創建、寶珠

山と号した。当時は京都三寶院の直轄であつたが、その後、智積院に属したという。

俊弘法印が事情により京都の本山を去りし時、この地に來りてこの寺の

住職となり、

その後、寛文四年、圓乗院に俊弘法印の署名の大師尊像他数種の遺物を残されており、

寺の隆盛を忍ばせるものがある。俊弘法印は、その後最勝院の住職となられて、この寺

は最勝院の兼住の寺となり、衰退した。

「二」

圓乗院が管理しているお堂がある。「立野観音堂」という。所在地は十六号国道沿いで、

寺の反対側陸橋の際に建立されている。『新編武蔵風土記稿』には、「観音堂」如意輪観

音を安ず。又薬師をも置り、長二尺五寸許、行基作と云。

寛永九年、仙乗院が粕壁宿へ移りし頃、当所に残せしと云。と記されている。

伝記によると、寛永五年【一、六二五】小淵村不動院の配下の修験者良実がこの地に笈を背負って来て、観音像と薬師像【行基作】を安置し、堂宇を建立して、仙乗院と号し姓を松園氏と称し、山王神社【当時は梅若丸伝説に基づく場所として建立したものとされ、別名梅若山王権現社と称して祭祀されていた。】と雷電神社の管理をしていたが、寛永九年【一、六三二】松園氏は粕壁宿に移り、春日部八幡神社の管理者となったので、この「立野観音堂」は圓乗院に移管されて、現在に至っている。

『寺の宝』

板碑【青石塔婆：中世の供養碑】が二体ある。

永仁二年【一、二九四】と元亨元年【一、三二二】

地藏尊

延宝五年【一、六七七】

六体地藏尊

享保三年【一、七一八】

その他

粕壁宿の宗門人別帳による檀家数【嘉永二年三月書上】五戸

梅田寺

寺号 曹洞宗江南山梅田寺

本尊 正観音菩薩像 運慶作

脇仏 地藏菩薩木像 作者年代不詳

縁起・沿革・由来

『新編武蔵風土記稿』には、曹洞宗、葛飾郡小淵村浄春院末、江南山と云、元和四年

の建立にて開山俊良、承応二年【一、六五三】十月十日寂、本尊正観音、運慶作と云。

八幡社・春日社・天神社・秋葉社・金比羅社と記されている。

『武蔵国郡村誌』には、「梅田寺」村の東南にあり、曹洞宗葛飾郡小淵村浄春院の末派

なり、開基創建詳らかならず。と記されている。

『寺の伝記』

故老の伝説によると、外峰甫教和尚が古跡に錫杖を留め小庵を創建して説法・勧募し、信徒を募りしが、この寺の始まりと伝えられている。後に幸手領小淵村の浄春院七世の天室周梵禅師が願い上げて一寺とし、土地の名を以て「梅田寺」としたと云。しかし、少録で無檀家の平僧のため、浄春院よりの援助を受け、五世浄慶和尚の時代に浄春院の檀家の中から菩提の申し出があった。これが当寺の始まりであると伝えられている。

この寺の開山僧は、承応十年十月【一、六六二】示寂と伝えられている。

内牧地区の寺の概要

内牧地区には、中・近世時代に多くの寺が存在していたが、明治初期に廃仏毀釈令の措置により無檀・無住の次の寺院が廃止された。それぞれの寺院について史書と照合して次に記載する。

内牧村

傳宗院

『新編武蔵風土記稿』には、曹洞宗、上野国富田大中寺末、龍焼山と

号す。開山天嶺、天正五年寂す。本尊釈迦・観音堂と記されている。

観音院

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、東村西光院末、谷田山と号す。開山祐尊、慶長元年【一、六〇〇】寂す。不動を安ぜり。と記されている。

智明院

『新編武蔵風土記稿』には、新義真言宗、東村西光院末、菩堤山と号す。開山祐榮、康正元年【一、四五五】寂す。本尊不動を安ぜり。と記されている。

南蔵院

『新編武蔵風土記稿』には、修験、葛飾郡幸手不動院配下、中興の僧大乘院春和、明暦元年【一、六五五】五月朔日寂す。本尊不動。と記さ

れている。

『武蔵国郡村誌』には、その記載はないが、但しこの住僧は寺の廃止と同時に村の鎮守「鷲・香取神社」の宮司となり現在に至る。矢島氏これなり。